

家族情緒と家族研究

—戸田貞三の「感情的融合」概念を導きとして—

慶應義塾大学大学院・日本学術振興会 本多真隆

1. 目的

家族や友人関係など、人びとが形づくる多様な関係性を指す際に用いられる「親密性（親密圏）」の概念は、現代の社会理論においてその重要度を増してきている。その影響は、これまで「家族」を中心にあつてきた家族社会学にも波及し、血縁や法的契約に拘束されている既存の「家族」概念を超えた、幅広い関係性を捉える概念として着目する動向もみられる。とはいえ、『親密性』という概念への関心が高まってきたことは間違いないものの、じつはこの概念にはそれほど明確な定義が与えられてきたわけではない（田淵 2013: 18）という指摘も、現状の一側面である。議論を精緻化していくためには、これまで「親密性」、あるいはそれに類する概念がどのように語られてきたかを、ある程度明確化する必要があるのではないだろうか。

本報告は以上の問題関心のもとに、家族社会学の嚆矢である戸田貞三が提起した「感情的融合」概念（戸田 [1937]1993）を導きとして、家族社会学で議論されてきた家族情緒を検討する。この概念は家制度研究だけでなく、「核家族パラダイム」へと舵をきった 1960 年代以降の家族社会学においても、家族の定義を定める際に度々参照されてきた。本報告は、家族研究者の観察や理論は、彼ら／彼女らが所属する社会の時代的背景や家族観とは無縁ではないという視点を取り、家族社会学で議論されてきた家族情緒を知識社会的に検討する。

2. 方法

主な分析対象となるのは、戸田貞三の学説を参照した論者による家族理論である。そのなかには、有賀・喜多野論争や、森岡清美の家族定義なども含まれる。分析にあたっては、各々の理論が「何」を家族情緒の発生の要件と位置づけているか、またその情緒的關係は「生活」や「扶養」といったキーワードとどのように結びついているか、といった論理構成をみていく。戸田の「感情的融合」概念を参照する論者が、各々の家族理論の問題意識と照合させながら議論を展開している過程を描写し、その解釈の時代的変遷を明らかにすることが基本的な作業となる。また傍証的に、時代背景を示すテキストや、分析対象と同時期に展開された家族理論も参照する。

3. 結果

検討の結果まず明らかになるのは、「感情的融合」概念をめぐって多様な解釈がなされてきたということである。また家族研究史の議論をひろくおっていくと、家族情緒の単一的な理解が議論の妨げになっていた様相（特に夫婦関係、血縁外の関係性をめぐって）も確認できる。そして、こうした多様な読み方がされてきた理由は、戸田の立論のなかに内在しているものでもあった。

4. 結論

これまで特権的な「親密性」の場であった「家族」が、どのような言葉や論理に拘束されていたかということの一端を明確にするという点において、本報告は、「家族」のオルタナティブを構想する際のひとつの礎石になると思われる。

文献

田淵六郎 2013, 「家族研究と『親密性』」『社会学論集』37.
戸田貞三, [1937]1993, 『家族構成』『戸田貞三著作集 第四巻』大空社.